
魔法少女リリカルなのは 転生者の伝説

観月 衛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 転生者の伝説

【NZコード】

N1702BA

【作者名】

観月 衛

【あらすじ】

ゼルダの伝説の熱烈なファンで主人公のリンクに憧れ剣の修行を行っていた主人公がリリカルなのはの世界に転生する話です。

プロローグ

俺は今、見渡す限り白色が続く謎の場所にいる。

「リゼルダだ？」

確かにさつきまで家で剣の修行を終えてゼルダの伝説スカイウオードソードをしていたはずなんだが。おまけに女人人が土下座しているし。

とりあえず俺は女人人に話しかけることにした、が

「あの～」

「ひこつ……」

「？」

「「めんなさい」「めんなさい」「めんなさい」「めんなさい」「めんなさい……」

女人人はずーっと俺に土下座状態のまま謝り続けてくる。

「とりあえず落ち着かせてみよつ。

「あの～「「めんなさい」「めんなさい」「めんなさい」「めんなさい」「めんなさい……」・・・・・」

「まだ」「こいつ錯乱してやがる……」うなつたら

「いいかげんにじつ、このアマーニー・シ・・・・・」

ドカンシ！！

「痛い！？」

とりあえず殴った。

「落ち着いたか？」

「はい取り乱してすいません。」

「でここ何所？」

「ここは死後の世界です。」

「じゃあ死んだのが俺？」

「はい・・・驚かないですね。」

「まあ死因が気になるけど生きようが死んでいようがどうでもよかつたし死ぬ前まで自分の存在意義を考えてたしな・・・で俺この後どうなるの？」

「今回の件は私のせいなので転生をせます。」

「・・・だが断る拒否権はありません。なんだとーーー？」

「転生の際に特典3つと転生先を選べます。どうしますか？」

「え～因みに転生先って何所？」

「魔法少女リリカルなのはの世界です。」

「・・・・・・あ～思い出した確か友人の伝説の青年Aが俺に進めてたな！軽く再放送見たけど。」

「誰ですか？！その伝説の青年Aって！？」

「ん？えっと簡単に言つと冬のコノハヅクマーケット一日目に現れるランニングシャツと短パンで冬ソノリに参加してる友人。一部ではもう噂になっているよ。」

注意リアルで存在してて作者の友人です。

「・・・まあいいでしうそれより早く特典決めてください。」

「また、ほかに転生者はいるのか？」

「はい、いますよ。」

「そんじゃあ・・・よし決めた一つ目ゼルダの伝説シリーズで出てくる武器、能力、アイテム等を全部くれ。もちろん敵として出てきた奴の能力やギラヒムも俺がマスターだと認識させた上でくれよ。後消費アイテムは生産できるようにして冒険ポーチには、物が無制限で入るようしてくれ。」

「わかりました。」

「一つ目俺の姿をゼルダの伝説のリンクの黒髪、黒瞳のバージョンにしてくれ。」

「はいはー」

「そして最後だが・・・マスター・ソードとギラヒムになのはの世界で出てくる能力や魔法関連の無効化能力と転生者の特典の無効化能力を付属してくれ。」

「わかりました。ではそれで決定します。でもよかつたんですか? デバイスとか無いと空も飛ばないし転送もできませんよ?」

「????何言ってんの転送なら時のオカリナ使えばいいし空ならガノンドルフの力使えばいいじゃんか?」

「・・・そうでしたねでは、転生させますね。あつ時期は無印で10歳からスタートですから。家とともに用意として冒険ポーチに場所の書いた紙入れとりますから。」

「ああ色々どうも。」

「では、転生させます第2の人生を楽しんでください。」

どうもつこわしき「転生させられた自称リンク（偽）」です。

現在の状況を把握すると現在夜で公園らしき場所で倒れていたようです。

なぜわかつたのかと言ひと地面で寝ていたようで背中がメッチャ痛いんです。

まあそんなことさておき現在俺が持っている物を確認しようと思います。

服装ですか・・・シャドウリンクの服ですね・・・まあ黒髪に頼んだんではそれは良しとします。

それでは注文したものがあるかチェックします。

腰にある冒険ポーチの中身を見てみます。

- ・・・んなんか底が見えないけど・・・リアル四次元ポケットか！
- まあ取りあえず手を突っ込んで中身を確認しよう。
- まずは・・・お！なんか剣の柄らしき物の感触が・・・あ～これは・
- ・・コキリの剣でした。

なんか実際見るとナイフみたいだな・・・気を取り直して他のアイテムを見よう・・・今度はパチンコが出てきた・・・なんか時オ力の子供時代の装備品しか出でこないぞ！どうなつてるんだ！その後もバクダン、ボムチュウ、空き瓶、ブームラン等しか出でこなく諦めかけたところに時のオカリナが出てきた。しかもなんかメモが張つてあつた。

「なになに・・・時の歌は時間戻しができたらもう神の領域なのであなたの年齢やゼルダシリーズの武器やアイテムの変更用に改変しました。使用方法は作品を想像しながら時の歌を吹けば良いです。ワープの歌はあなたが場所を想像すればワープできます。マスター ソードに関しては無制限で出せますが15歳以上になると使用できないので気をつけください・・・なるほどじゃあ早速。」

早速出したアイテムをしまい時の歌を吹いた。シリーズは・・・マスター登録もしたいからスカイウオードソードを想像しながら吹いた。

～？～？～

吹き終わった。ん～やつぱこの音色は神だな～そんなことを思つて いるとゼルダ定番の青白い光が俺を包み込んだ。そして光が消えた 後俺は大人リンクになっていた。

「お～では早速持ち物確認を・・・」

最初に冒険ポーチから出できたのは、ビートルでした。その後も入手した順にアイテムが出てきそしてついにあの剣が出てきました。

「・・・マスター ソード・・・」

ゲームでもきれいな剣だと思っていたが実際に見ると本当に美しい剣だった。

神々しいオーラを放っている白銀刃は本当に俺を魅了させた。そしてマスターードが光だし光が剣から飛び出しその光は一人の少女になつた。

スカイウォードソードをプレイした人なら誰でもわかるだろう。

ファイだ。

だがここにいるファイは魔族長ギラヒムのよう人に間と見分けもつかない状態の普通の少女だった。

「マスター登録完了しました。おはようございます。マイマスター
リンク。」

あつやつぱりそななるんだ。まあ前世の名前なんてもう二度ないしな。

「正確には夜だからじんばんわだけどな。えっとファイでいいのか
？」

「イエスマスター。私は神よりあなたに従うように使わされました。
これからよろしくお願ひします。」

「ああよろしく。ところで、ギラヒムは？」

「僕ならここにいるよ。」

声がする方向に向くと魔族長、ギラヒムが木に寄りかかっていた。

「君が新しいマスターか、あのいけ好かない小僧に似ているのが好
かないがこれからよろしく頼むよマスター。」

あーやつぱり・・・まあ敵だつたもんな・・・

「ギラヒムは魔劍的な物のままなのか？」

「ああ僕は元々魔王様の剣だからね。それにそここのファイと違つて
闇関連の物の吸収能力も僕には備わつてゐるよ。あの女神が付属し
た効果だけね。」

「へーそんな効果もつけてくれたんだあの女神的なの。なんか最初に
殴つたの謝つとけばよかつたかな?
そんなことを考へてると二人が何かに気づき反応のあつた方向を
向いた。」

「マスター魔力反応と結界の発動を感じしました。この世界の原作開始の結界である確率87%です。」

「転生者の反応もあるようだよマスター。」「するんだい。」

ああもう原作始まるんだ。
でも今はあんま知らない此処の地理とか見ておきたいし拠点の家も調べたいから・・・

「ファイ転生者の反応にダ・ウジングができるよつて聞いておいてくれ。今日は介入しない。」

「イエスマスター。」

「いいのかいマスター？邪魔な奴なら殺したいだけど。」

「いやいいそれに俺が戦いたいと思つてるのは再放送で見たあのよくわからない化け物だからね。」

「それについてだけどそれ僕のおもちゃにしていいかい？」

「ちょっと戦つてみてからなら好きにしていいよ。あれなんかすべ
再生するひこじ。」

「感謝するよマスター。」

「それじゃあ行くか。」

「」イエスマスター。」

そつまうとファイはマスターソードに戻り、ギャラヒムは俺と共に歩き
始めた。早速拠点となる家に行つてみるか。

冒険ポーチに入っていたマップを見てまずは今後の拠点となる家に向かつて自稱リンクこと俺とギラヒムだが途中できれいな青い宝石を拾つた。

「・・・何これ？」

なんか妙な力を感じるんだが

「これはジュエルシードだよマスター」

隣にいたギラヒムが答えマスターのファイが出てきた

『マスター、ジュエルシードとは強力な魔力を秘めた結晶体です。願いをかなえる石と言われていますが実際はそこまでの力は無くある程度ゆがんだ形で願いをかなえるものです。』

「後は次元震を起こすものとして使われてるよ。」

「ふーん・・・一人とも詳しいけど何んで?」

『私たちはマスターの物になる前にある程度の情報を女神様からも
らっています。』

「あ～なるほど。」

つまりこれはゼルダで言つところの陰りの鏡の破片や陰りの結晶石
と同じようなものか・・・んこんなものが地球にあるってことね・・・
・

「もしかしてこれ原作に関係するもの?」

『イエスマスター、これは今行われている。のちにヤト事件と呼ば
れるものに深くかかわってくるものです。』

マジかよ俺はただある程度情報集めたら再放送であったようなモン
スターだらけの世界行つて戦いとか思つてただけなのに捨てよっか
な?・・・ん待てよ

「これ集めてる原作の奴らつて強いのか?顔覚えてないけど。」

「セーね」の時期だつたら弱いんじゃないかな？ 転生者はわからな
いけど。」

「じゃあその転生者の実力を見るためにそれを利用するか。

「ん？ あ～やつめ！」とかなかなか面白くないかい。」

「うわざりがヒムには俺の考えてこむじが分かつたようだ。

「じゃあギラヒムここつ（ジュエルシード）を明日発動する魔物に
変えて飛ばしてくれ。」

14

「お好い御用だよ。」

やつめうとギラヒムは指を鳴らしこの手に在つたジュエルシードは
どいかに消えた。

「ファイ、ジュエルシードのダウジングはできるか？」

『イエスマスター、ジュエルシードをダウジングの対象として登録
します。』

さて魔物化したジュエルシードどう対処するか見せてもらひつよ転生者
それが終つたらジュエルシード集めでもするか・・・

? ? ? s . i d e

俺の名前は高橋秀一 転生者だ。

俺の容姿は神の奴に頼んで銀髪オッドアイだ。

しかも転生した世界は魔法少女リリカルなのはの世界だ。

よしゃあ！！俺 t u e e e e e e e e ができる上に俺のハーレムも夢じゃない！

なのは達とのフラグを立てまくって俺の王国を作つてやるぜ。なんせ俺には F a t e のエクスカリバーがあるんだからな！

「どうしたの秀一君？」

「いやちゅうと考ふ事をね（二口）」

「そっそく（汗）（その笑顔止めて気持ち悪いよ）」

『一人ともジユエルシードだ！』

「……行くぞなのは！」

「うん。」

よしここで敵をかっこよく倒してなのはを俺の虜にしてやるんだ！

リンク side

『マスター転生者と主人公達が移動を開始しました。』

現在俺たちはジュエルシーードの発動地点（神社）が見える位置にいる。

昨日は家に行つて色々確認し空き瓶にシャトーロマリーなどを補給して町の散策をした。

因みに今は子供状態でキーターのお面をつけています。

装備は金剛の剣、ミラーシールドです。

それによこに来るまでに4つほどジュエルシーードを回収したほとんどのウジングって便利だね

おつづくやけに発動したジュエルシーードが魔物になるよつだ。

ジュエルシーードは黒い炎に包まれ蜘蛛のような形をした魔物に変化した。

「ギラヒムあの形状から察するにあれって……」

「ああ時オ力の最初のボスゴーマだよ。」

・・・やつぱりかまあでも相手の洞察力と力を見るにはこつが一番かもな

「因みに倒し方とかは、変わってるのか?」

「ジユエルシード状態じゃないと封印できないようにしてただけを倒し方は時オカと同じぞ。」

つまり皿をパチンコなどのものでひるませたら剣で切るか・・・

『マスター彼女らが着いたようだす。』

もう来たか。さても手並み拝見といひじゃないか・・・

俺は、今戸惑っている。

なぜなら原作ではこの神社では犬の化け物がでたはずだ。
なのに俺たちの目も前にいるのは蜘蛛のような化け物だからだ。
原作ではこんな化け物は出なかつたはずだ。

「ユーノ君これって。」

「原生生物を取り込んだんだ。でもこのまがまがしい姿は」

「そうこの蜘蛛はただ『デカい蜘蛛とゆうわけじゃない
たとえるならそう魔物だ。」

「そんなの関係ねえただぶつた切るまでだ！」

そう言つて俺はエクスカリバーを化け物に近づき振り下ろした。

なのは side

私はバリアジャケットを開いた

今駿一君が蜘蛛のお化けに向かつて剣を振り下ろしたの、でもその

剣は、弾かれて蜘蛛は全くの無傷
その上秀一君に襲いかかったの。

「つぐー！」

お化けの攻撃をうまく避けた秀一君そして再び剣を構えたの

「エクスカリバ――――！」

秀一君の必殺技が出たの

あたり一面が光に包まれたさすがにあのお化けもこれでお終いな

そして光が晴れたが、ゴーマは無傷のままその場にいた。

「つなー？」

「「そんな…」

リンク side

「これは・・・ひどいな・・・」

「あんな力任せで僕が作ったゴーマが倒せるわけないだろ?」

転生者の戦いを見ていたが・・・ひどいものだつた。ただの力任せの攻撃、相手の弱点も理解しようとしたまゝだ。力では勝てないよ。

「・・・せっかくだ今の僕の力の確認にでも行くか。せっかく作ったゴーマを倒すのは、惜しいけど。」

「行くのかい?なら僕は、ここでマスターの力を見せてもらいつよ。」

「ああ

先ず勇者の弓を出しゴーマの目に向けて放ったのちガノンドルフの力を使い空を飛び俺は現地に向かつた

なのはside

私は倒せないなら封印すればいいと思い封印を施しましたが、封印

できずどうすればいいか考えていました。

でもその時一本の矢がお化けの目玉に当たりお化けが苦しみだしたの。

そして次の瞬間田の前に狐のお面をかぶつて後ろには剣と不気味な顔が書いてあるきれいな盾をもつた黒い服をきた私より少し背の高い人が現れたの。

「君は？！」

ユーノ君が誰か聞いたただそうと聞いたけど、その人はユーノ君の話を無視してひるんだお化けの目を背中の剣で何回も切りつけた。

そのお化けはダメージを受けたように体が一瞬赤く光つたりしたそしてしばらく切り付けられたお化けは突然大きなうめき声を上げて蜘蛛みたいなお化けは形を維持できなくなつたように体がぼろぼろ崩れだして消えた最後に残つたのはジュエルシードだけだった。

「・・・」

黒い服の人は、倒したのを確認したらウエストにあるポーチから青いきれいなオカリナを出して曲を弾き始めたの

～？～？～

(きれいな音色)

私は素直にそう思った

「君はいつたいなものなんだ！」

ユーノ君が質問するけどその人は、いつたんこちらを見たけど無視してそのオカリナを吹き続けました。

「てめえ無視してんじゃねえ！」

やけをさしたのか秀一君が剣で切りつけようとしたけど

その瞬間にオカリナを吹き終えた狐のお面の人が光だして光になつて空に消えていったの

(あの子いつたい誰だつたんだろう。)

3話（後書き）

撤退した時の曲は光のプレコードです。
ではまた

リンク side

昨日はゴーマを倒した。はっきり言つて、ゴーマは楽勝だった。
どうせなら突きしか効かないようにしてほしかった。

まーそんな話はさておき現在はジュエルシード集めとひよつとした
資材集めをしている。

なぜ資材集めをしているかと言つといちいち次元を超えるためにボ
スの能力を使うのもあほらしく感じたので、時空石を利用した船を
製造しようと考えたからです。

ファイに聞いたところ時空石は次元に干渉する能力に関しては管理
局?とか言う組織の船の動力源と同じらしいので建造することにし
た。

デザインは、ディズニーのパイレーツからフライング・ダッヂマン
号にしようと思うアレが一番ゼルダの帆船に近いし、なんせかつこ
いいからさ、これからサルロボを大量生産して船を・・・おっとジ
ュエルシードの反応が近くなってきた。

『マスター前方の木の根元にジュエルシードの反応があるようだ
のか?』

注意リンクは、A.sの断片的な内容しか知りません。

「うと見つけこれで「そのジュエルシーードを渡してください」？」

なんか女の子の声がした。

声がする方を見るとそこには見るからに露出の多い服を着てマントを羽織り斧を持った少女がいた。
十人に聞いたら全員が美少女と答えるだらうがリンクは違つことを考えていた。

(田のやつ場に困る)

まあ取り合えず話をしないと始まらないので取り合えず話へ。

「取り合えず一言呟かせてくれ」

フエイトは警戒するが次の一言でひょいしぬけした

「その格好恥ずかしくないの？それと魔法少女に憧れるのは、そろ卒業しなさい」

「えつ？…ええっと…・・・あのやの」

「はあ～まあこの際この話は置いておこしてジコエルシードってのは
？」

取りえず知らないふりをする

「あつはい！貴方が今拾つたその青い石です。それがどうしても必
要なんです」

「ああこれか、でもなんが必要なんだい？」

「・・・」

「答へられないのか・・・なら俺の田を真つ直ぐ見てくれ」

「えつ？…あつはい！」

フロイトはリンクを田を見た

(・・・迷いのない真っ直ぐな田をしてるなだかどこかに悲しさも
感じるな・・・それに体力も低下してるな所タムチか何かに叩かれ
た跡があるな・・・まあこの子な大丈夫だろ)

「うともちつ良いよ。ほれ」

セツナヒコとコンクは、フロイトに向けてジュエルシードを投げた。

「えつ？はわあわああ」

フロイトは慌ててジュエルシードを受け取った。

「あつあのどひつて？」

「ん？君が迷いのない真っ直ぐな田をしてたから

「えつたつたそれだけで？」

「ああ人を見る田は腐つてないからな。君は、大丈夫だと判断出来
た。」

「あつあつがとひ

「おつとわうだー」れはサービスだ

そう言つたリンクはシャーロロマーの入つたビンを渡した。
あのこれは?

「困つた時や疲れた時に飲みな。あつと役立つか」

「あの、あつがとひります

「それじゅな

「あの名前ー

「ん?」

「名前教えて下さー。私はフュイー・テスター・テスター・サッカって言つてます

「・・・リンクだ。機会があつたらまた会おうテスター・サ

「うん。ありがとう。リンク」

そしてリンクは、その場を後にした。

フェイツ side

リンク・・・不思議な人だ。最近まで変な人からジユエルシード集めを手伝うと言われて正直うつとうしいかつたし、その人の視線も気持ち悪かった。

でもリンクは、何も言わずジユエルシードをくれた上に、この牛乳もくれた。そして何より不快感を感じなかつた。

「・・・また会えるかな？」

その時からだらうか私はリンクのことが頭から離れなくなつてきていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1702ba/>

魔法少女リリカルなのは 転生者の伝説

2012年1月14日17時15分発行